

令和6年度「高校生ステップアップ・プログラム」 実施報告書

1 「高校生ステップアップ・プログラム」とは P 1

2 各指定校の取組（18校）

空知	（1）北海道夕張高等学校	P 2
	（2）北海道長沼高等学校	P 3
	（3）北海道栗山高等学校	P 4
石狩	（4）北海道札幌厚別高等学校	P 5
	（5）北海道札幌白陵高等学校	P 6
	（6）北海道江別高等学校	P 7
	（7）北海道札幌北高等学校（定時制）	P 8
	（8）北海道有朋高等学校（定時制）	P 9
後志	（9）北海道蘭越高等学校	P 10
胆振	（10）北海道白老東高等学校	P 11
	（11）北海道追分高等学校	P 12
	（12）北海道鶴川高等学校	P 13
渡島	（13）北海道南茅部高等学校	P 14
	（14）北海道松前高等学校	P 15
宗谷	（15）北海道礼文高等学校	P 16
オホーツク	（16）北海道雄武高等学校	P 17
十勝	（17）北海道音更高等学校	P 18
	（18）北海道帯広柏葉高等学校（定時制）	P 19

3 高校生ステップアップ・プログラム実施要項 P 20

「高校生ステップアップ・プログラム」とは

1 趣旨

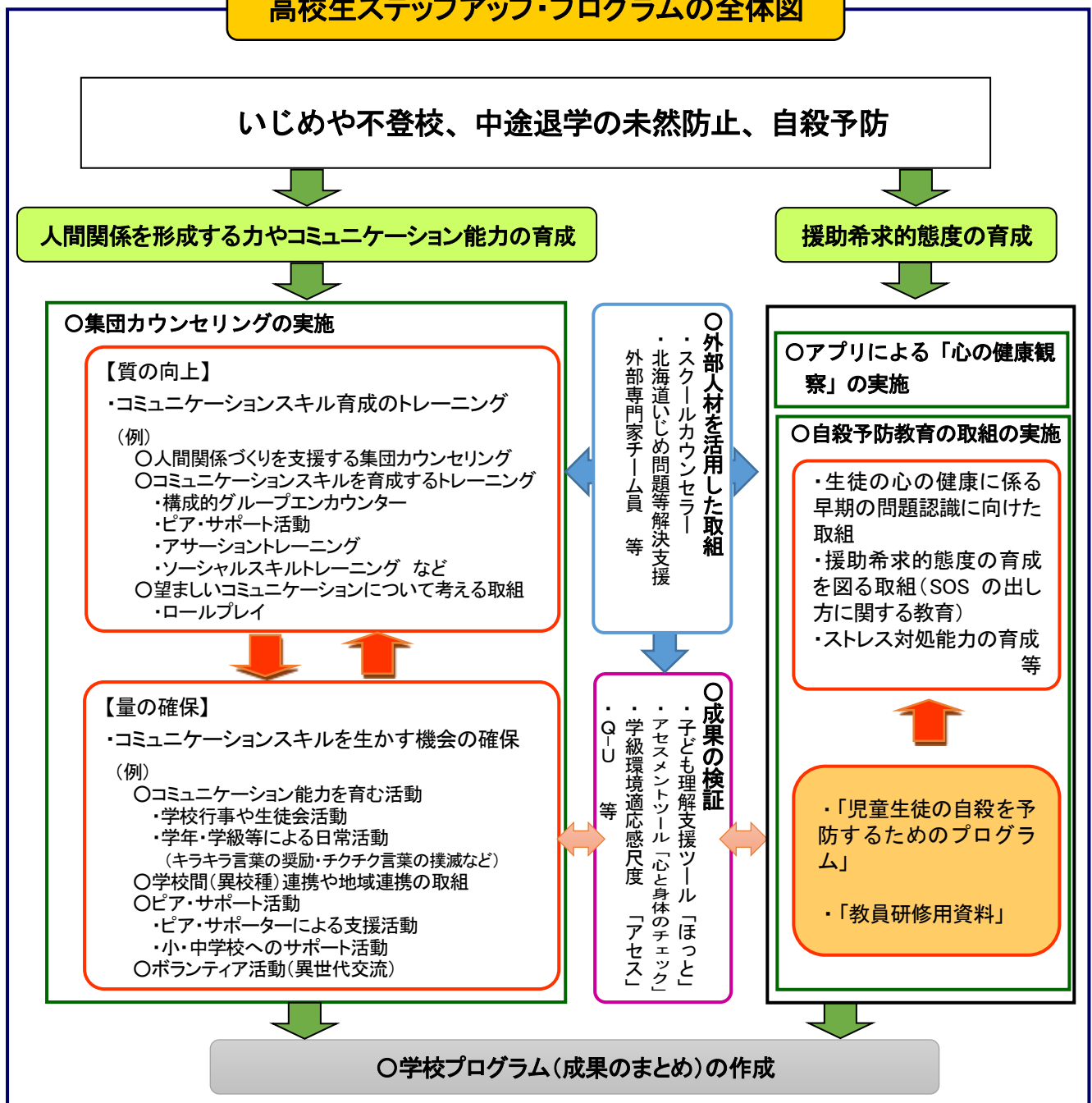
高校生のいじめや不登校、中途退学の背景として、「人間関係をうまく保てない」など、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の不足によるものもあり、心の不安定さからいじめや不登校、中途退学につながる場合が少なくない。また、本道においても、児童生徒の自殺が少なからず発生しており、北海道学校保健審議会の調査では、自殺や死について考える児童生徒が一定程度いるという結果が出ていることから、児童生徒等の自殺予防に関する正しい知識や援助希求の重要性に関する認識を高める必要がある。

このような状況を改善し、道立高等学校におけるいじめや不登校、中途退学の未然防止、自殺の予防を図るため、予防的・開発的な視点に基づく生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組（以下、「集団カウンセリング」という。）や、自殺予防教育プログラムを活用した取組を実践するとともに全道の高等学校への普及を図る。

2 事業内容

- (1) 集団カウンセリングの実施
- (2) 自殺予防教育の取組の実施
- (3) アプリによる「心の健康観察」の実施
- (4) 外部人材を活用した取組の実施
- (5) 成果の検証
- (6) 学校プログラムの作成

高校生ステップアップ・プログラムの全体図



北海道夕張高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：59名

本校の目指す生徒像

- ・社会に通用する生徒 ・主体的で自律的な生徒
- ・粘り強く努力する生徒
- ・チャレンジする生徒

本校の現状

- ・生徒が、市内の小・中学校から高校へと固定化した人間関係で生活する中で、他者との関わりについての悩みや困りごとを抱えている傾向。

本校の取組の特徴

- 1 スクールカウンセラーによる集団・個別カウンセリングの充実
- 2 アセスメントツール「心と身体のチェック」を活用した個別面談の充実

取組の内容

○ スクールカウンセラー（以下、S C）による支援

1 集団カウンセリング

(1) 第1学年「ストレスコーピングとセルフケア」

自分にとっては何がストレスになるのかを知り、それに対処する自分のコーピングリストを作成し、ストレス軽減に活かせるようにする。

【生徒の感想】

- ・自分のストレスに向き合ってみて、そのストレスをどうやって対処するのか知ることができた。

(2) 第2学年「バウンダリー ～心の境界線の守り方～」

バウンダリーという言葉を知り、日常的にバウンダリーがあいまいになっている場面があることに気付きを向ける。

【生徒の感想】

- ・バウンダリーを身に付けることで、自分自身と他人を区別して、ストレスの原因などを減らすことができた。

(3) 第3学年「マインドフルネス ～自分の気持ちを感じるトレーニング～」

マインドフルネスについて理解を深め、環境や周囲の人、自分の感情などに振り回されず、自分を保つことができる力を身に付ける。

【生徒の感想】

- ・自分の精神を安定させて物事を俯瞰し、客観的に考える力を付けることができた。

2 個別カウンセリング

(1) 放課後、希望した生徒を対象に実施する。

(2) 実施後、関係教員とS Cによる情報交換の場を設定し、生徒対応などについて検討する。

○ 教員によるアセスメントツール「心と身体のチェック」を活用した個別面談

- ・夏季休業後に実施したツールの結果を活用し、全校生徒を対象に実施する。
- ・必要に応じてS Cによる個別カウンセリングを勧め、希望した生徒を対象に実施する。

取組の成果等

○ 成果

S Cによる集団カウンセリングの実施により、自己肯定感やストレス対処能力の育成・向上を図ることができた。

○ 課題

「心と身体のチェック」の結果や個別面談に関する情報共有を十分に行い、生徒の実情に応じて効果的な実施時期や実施方法について、教職員全体で課題意識を共有し、検討する必要がある。

○ 次年度に向けて

S Cとの連携を強化し、現状の集団カウンセリング体制を継続するとともに、生徒理解・生徒指導対応に係る校内研修の一層の充実を図る。

北海道長沼高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：110 名

本校の目指す生徒像

- ・生活習慣・マナーを身に付けた生徒
- ・集団の中で活動する生徒
- ・進路実現に向けて自らを見つめる生徒

本校の現状

- ・生徒のコミュニケーション能力に課題がある傾向。
- ・生徒自身にも、良好な人間関係を構築する力を高めることに課題意識のある傾向。

本校の取組の特徴

- 1 多様な外部講師の活用による、生徒のコミュニケーション能力の向上
- 2 差別や偏見なく、人権を尊重する態度の育成

取組の内容

○ 人間関係を構築する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 多様な外部講師の活用による、生徒のコミュニケーション能力の向上

- (1) 北海道医療大学講師による、心の健康増進を図る講話・グループワーク
- (2) 日本ファシリテーション協会講師による、話し合い技法の講義・グループワーク
- (3) 株式会社「地球はメリー・ゴーランド」講師による、自己理解・他者理解の深化
- (4) スクールカウンセラーによる集団カウンセリング



(1) 講話「心の健康増進」



(2) 講義「話し合い技法」



(3) 自己理解・他者理解

2 差別や偏見をなくし、人権を尊重する態度の育成

北海道レインボー・リソースセンター（L-Port）講師による、多様性に関する講話

3 生徒理解支援ツール「ほっと」「ほっとプラス」「心と身体のチェック」「セラプラス」活用

取組の成果等

○ 成果

- ・多様な外部講師を活用したことにより、学校の授業だけでは得られない深い学びへとつながり、良好な人間関係を築く力の大切さについて意識付けができた。
- ・アイヌ文化に触れたり、LGBTQ 当事者として同性パートナーシップ制度を活用している方と交流したりすることを通して、異文化や多様な性の在り方を考える機会となった。



○ 課題

- ・「心と身体のチェック」「ほっと」「ほっとプラス」の結果等、生徒の状況に関わる客観的な情報を全教職員で共有し、生徒理解・生徒指導の充実を図る必要がある。

○ 次年度に向けて

- ・生徒の発達の段階と現状の課題に対応した学習内容の精選と年間指導計画を見直す。
- ・アセスメントツールの効果的な活用を促進するための教職員研修の充実を図る。
- ・令和9年度（2027年度）の長沼町内の小中一貫校開校に向けて、現段階からの町内の小・中学校との連携を推進する。

北海道栗山高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：119 名

本校の目指す生徒像

- ・主体的に知性を磨き、豊かな情操を身につける生徒
- ・豊かな自然に親しみ、強固な心身を鍛えていく生徒
- ・勤労を愛し、奉仕の精神を持ち社会貢献できる生徒

本校の現状

- ・素直で人懐こい生徒が多い一方で、コミュニケーションスキルに課題があり、人間関係の構築に悩みを抱えている傾向。
- ・不登校傾向の生徒へのケアの充実が必要。

本校の取組の特徴

- 1 専門家からの指導助言及び教職員研修による教職員のカウンセリング力の向上
- 2 日常から困り感をもつ生徒のストレス対処能力及びコミュニケーションスキルの育成
- 3 不登校傾向の生徒に対する支援

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

- (1) 保健講話
性の多様性やデートDVの啓発、自他ともに認め合う人間関係の育成（第1学年）
- (2) 保健室等別室の活用
不登校傾向の生徒に対し、保健室等別室での学習支援を継続的に実施
- (3) オンラインカウンセリング
不登校生徒に対する電話を含めたオンラインカウンセリングの実施
- (4) 教職員全体での生徒理解
子ども理解支援ツール「ほっと」を活用し、生徒のコミュニケーションスキルの現状と課題を把握、教職員間での共有

○ 自殺予防教育の取組

- (1) 第2、3学年
保健体育科（保健）自殺予防の観点から、意思決定と行動や心の問題について学習
- (2) 音楽科
心のライブ授業を実施、音楽を通した生命尊重について理解・啓発

○ 外部人材を活用した取組（スクールカウンセラーによる支援など）

- (1) 専門家からの指導助言及び教職員研修による、教職員のカウンセリング力の向上
- (2) 4、11月に教育相談週間を設定し、教職員が全生徒との面談を実施、生徒の日常の不安や悩み等を把握するとともに、全教職員で情報を共有
- (3) スクールカウンセラーによる講話を通して、誰かに悩みなどを相談することの重要性や心身の健康について理解を促進

取組の成果等

○ 成果

- ・教職員による生徒への面談を通して、生徒と教職員との信頼関係を深めたことにより、生徒の自己肯定感が高まった。
- ・専門家（北海道医療大教授）による研修により、生徒、教職員のコミュニケーションスキルが向上した。
- ・不登校生徒に寄り添った学習支援及びカウンセリングにより、別室学習を経て、一斉授業に復帰する生徒もみられた。

○ 課題

- ・学校設定科目「栗山と福祉」を通して、相手を思いやる心を育みながら、生徒個々の自己肯定感を高める取組の一層の充実を図る必要がある。
- ・地元出身の生徒と地元出身でない生徒とのコミュニケーション不足が様々な場面で生じていることから、人間関係を構築することに苦手意識をもつ生徒への支援を充実させる必要がある。

○ 次年度に向けて

- ・北海道介護福祉学校を中心に、地域の異校種や福祉施設との連携を促進する。
- ・生徒の自己肯定感を高める取組、全教職員で「目指す生徒像」を共有した「人間力」を育成する。

北海道札幌厚別高等学校

課 程：全日制
学 科：総合学科
生徒数：813名

本校の目指す生徒像

自律的な行動がとれる生徒。豊かに逞しく生きることができる生徒。協働して新たな価値を創造しようとする生徒。

本校の現状

コロナ禍を経て、生徒自身の逞しく生きる力が乏しくなっている傾向。

本校の取組の特徴

1. コミュニケーションワークショップを通じた人間関係の形成
2. ピアサポートによる体験や感情の共有
3. 「合理的配慮」の実践に向けての教職員の心構えづくり

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 コミュニケーションワークショップを通じた人間関係の形成

4月に新入学生と、クラス替え直後の2年次生に対して、北海道演劇財団のプログラムによるコミュニケーションワークショップを実施した。



2 ピアサポートによる体験や感情の共有

生徒の発案により、スクールカウンセラーも参加し、肉親と死別した生徒たちのグリーフケアのピアサポートを9月に実施した。

3 「合理的配慮」実践に向けての教職員の心構えづくり

8月と9月には本校スクールカウンセラーによる、主として「傾聴」を行うための研修会を実施した。また、11月には精神科の医師による精神疾患等への対応と配慮についての研修会を実施した。

取組の成果等

○ 成果

- 1 新たな人間関係の構築のみにとどまらない、「協働による新たな価値の創出」に至る刺激的かつ創造的なワークショップを実施することができた。
- 2 参加者の満足度は極めて高かった。
- 3 生徒が安心して生活できる学校づくりのために、「合理的配慮」に基づく対応が不可欠であることを再認識した。

○ 課題

継続的なカウンセリングを必要とする生徒の増加に、資金面・時間面で対応しきれていない。

○ 次年度に向けて

オンラインでのスクールカウンセラー面談など、カウンセリングを必要とする多くの生徒のニーズに応える方策を模索する。

北海道札幌白陵高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：189 名

本校の目指す生徒像

- ・感謝の心を持ち、社会に貢献する生徒
- ・自ら進んで視野を広げ、知性を磨く生徒
- ・心身を鍛え、たくましく生きる生徒

本校の現状

- ・生徒一人ひとりが自己理解や他者理解を深め、自他の命の尊さや価値を再認識する必要がある。
- ・生徒の自己肯定感を高めていく必要がある。

本校の取組の特徴

- ・外部講師によるコミュニケーショントレーニングを通じた、自己肯定感やコミュニケーション能力の醸成と育成
- ・スクールカウンセラーによるカウンセリングを活かしたきめ細かな生徒理解と生徒支援
- ・生徒の状況に応じた適切な外部連携

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

外部講師によるコミュニケーショントレーニングを通じた、自己肯定感やコミュニケーション能力の醸成と育成

【内容】構成的グループエンカウンターを主軸にしたエクササイズを実施

- ①生徒相互の信頼関係の構築にむけたコミュニケーション力、表現力の醸成と育成
- ②自分自身を高めるための「自己肯定感」の醸成と育成
- ③クラスの集団としての「協調性」や「他者への思いやり」の醸成や育成
- ④教員と生徒の相互理解

○ スクールカウンセラーによる支援と外部連携

【内容】・生徒及び保護者に対するスクールカウンセラーの個別継続的なカウンセリングの実施

- ・パートナーティーチャーによる特別な教育的支援を必要とする生徒への支援と研修の実施
- ・特別支援学校の研修への参加
- ・通級指導等について先行実施している高等学校との連携
- ・ヤングケアラー等支援が必要な生徒のため、相談先の周知
- ・特別な教育的支援を必要とする生徒の進路先を見据えた相談事業所等との連携

取組の成果等

○ 成果

- ・構成的グループエンカウターのエクササイズを通して、クラスや学年の生徒、教員が和やかな雰囲気の中で、自他の理解を深め、より豊かな信頼関係の構築につながるきっかけとなった。また、ルールに沿って活動することで、よりスムーズなコミュニケーションがとれ、集団の中の人間関係づくりも深まる体験をすることができた。
- ・外部連携によって、多様な進路を見据えながら生徒や保護者を支援する道筋をつけることができた。

○ 課題

- ・コミュニケーショントレーニングを通して得られた知識や体験を実践の場へとつなげるための機会や場の設定、教員によるサポート体制の整備や充実
- ・見過ごされている状況の生徒に対する具体的な支援の方策の検討

○ 次年度に向けて

- ・学校、家庭、外部機関と連携し、チームとなって生徒を支援するための具体的な体制づくり

北海道江別高等学校

課程：全日制

学科：普通科・事務情報科・生活デザイン科

生徒数：754名

本校の目指す生徒像

明朗快活で何事にも積極的に地道な努力を続け、自律的に行動でき、他者への思いやりを大切にできる生徒。

本校の現状

おとなしく素直な生徒が大多数である。対人関係において、周囲への配慮から自己開示することに消極的な生徒が見受けられる。

本校の取組の特徴

1. コミュニケーショントレーニングの実施…1学年の早期において構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングの手法を用いて集団カウンセリングを実施する。
2. ピア・サポート研修会の実施…生徒会保健局の活動として実施し、自己理解と他者理解を深めて互いに支え合う心を育てる。局員以外にも幅広く参加を呼びかけて実施する。

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

コミュニケーショントレーニングの実施

新入生が入学当初においてクラス生徒と良好な関係を築くための活動を行うことで、相談しやすい関係性のある学年・学級づくりをめざして実施した。SGEやSSTの手法を活用し、自己表現力やコミュニケーション能力を高める体験的な活動を通して悩みなどを互いに相談し合うような望ましい人間関係を確立していくことのできる態度や能力を身に付けることにつながった。参加した生徒からは「いろいろな人と親睦が深まり、他のクラスの人や同じクラスの友達とたくさん話せて嬉しかった」「話すことが苦手だったけどいろいろな人が助けてくれて楽しい活動になった」などの感想があり、多くの人とコミュニケーションをしつつ、良好な人間関係を築くためにはどのように考えて行動したらよいのか、あらためて考える機会となった。



○ スクールカウンセラーによる支援を活用した取組

保健局によるピア・サポート研修会の実施

自己理解および他者理解を深めつつ、自己開示能力の育成をねらいとして実施した。保健局員と有志の生徒で自己開示を意識するアサーショントレーニングを行った。「相談すること」というテーマでは、相手の受け止め方を想像しながら、気持ちが伝わる言葉使いをじっくり考えた。シェアの時間で「聞き方によって話し手の感情が変化することが分かった」「話を聞くときの姿勢や相槌が重要なポイントだと理解できた」という感想があった。また、教員によるロールプレイングを観察する場面では、気持ちのよい会話について「身体を相手の方へ向け、顔を見て話す」と会話が弾むことに気づいた」などの感想が寄せられた。

取組の成果等

○ 成果

コミュニケーショントレーニングやピア・サポート研修の実施により、参加生徒の多くがスキルアップを果たし、他人の気持ちを考えたり想像したりすることなど、他者理解の態度がより積極的になっていく変化がみられた。

○ 課題

実施時間の確保や内容の精選などを行い、担当教員の負担感を減らすための工夫やピア・サポート研修会への参加生徒を増やすための努力を継続し発展させる必要がある。

○ 次年度に向けて

学年や分掌の横断的な協力体制の構築や教員間における意思疎通の緊密化、および生徒への支援活動の連携強化を行う。

北海道札幌北高等学校

課 程：定時制
学 科：普通科
生徒数：86名

本校の目指す生徒像

- ・広く学び、深く考え、自ら行動することができる生徒
- ・人を人として尊重し、豊かな心を持った生徒
- ・前を向き、挑戦し、未来を切り拓くことができる生徒

本校の現状

- ・コミュニケーション能力と社会性の育成が必要。
- ・心の健康教育の充実に向けた校内環境の整備が必要。
- ・特別支援教育に関する教職員のスキルアップが必要。

本校の取組の特徴

1. 自殺予防教育の取組
2. スクールカウンセラーによる支援
3. アセスメントツール「心と身体のチェックリスト」の実施

取組の内容

○ 自殺予防教育の取組

- (1) スクールカウンセラーによる講話「心の授業～良いコミュニケーションのコツ～」
(援助希求的態度の育成)
- (2) スクールカウンセラーによる講話「心の授業～命の危機・『自殺』を防ぐために～」
(早期の問題認識（心の健康）)
- (3) 外部講師による講話（ストレス対処能力の育成）
- (4) 保健体育科の授業「精神の健康」（早期の問題認識（心の健康）)
- (5) スクールカウンセラーによる事例研修「心の教育」

○ スクールカウンセラーによる支援

4月～3月まで、生徒、保護者を対象とした個別のカウンセリングを実施した。また必要に応じてケース会議やコンサルテーションを実施した。

○ アセスメントツール「心と身体のチェックリスト」の実施

結果は特別支援委員会で分析し、要支援の生徒に対して担任による面談を実施した。また、必要に応じて継続的な面談や特別支援委員会による面談も実施した。

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

外部人材を活用して講師を招聘し、レクリエーションを行い、コミュニケーションスキルの習得や居心地のよいクラスづくりのきっかけづくりを行った。

取組の成果等

○ 成果

4月の早い段階で、1学年に対しスクールカウンセラーの紹介と講話を行い、7月と9月にスクールカウンセラーによる心の授業を実施したことで、様々な相談ができる大人の一人として、本校にもスクールカウンセラーがいることを理解させることができた。また、何かあったらいつでも相談できる場所として環境を整備することができた。さらに、今年度は、これから社会に進む4年生に対しても講演会を実施した。社会に向けて、不安を少しでも少なくする心のもち方等の授業を実施した。

○ 課題

教職員へ向けて、外部専門家チームを講師として招き、研修会を実施した。今後もさらに、特別支援教育への理解と合理的配慮の実践に向け、スキルアップを図るための研修が必要である。

○ 次年度に向けて

本年度実施した取組を継続するとともに、入学時の予防教育に重点を置き、1学年を中心にスクールカウンセラーを活用した講話や担任による面談を計画的に実施する。

北海道有朋高等学校

課 程：定時制
学 科：普通科・事務情報科
生徒数：282名

本校の目指す生徒像

- ・自ら伸ばせ 輝かせ
- ・心豊かに 気品あれ
- ・進取で強く しなやかに

本校の現状

多くの悩みを抱え、不登校傾向のある生徒に対して、校内委員会と各年次がスクールカウンセラーと連携しながら支援に努めている。

本校の取組の特徴

- 1 スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの充実
- 2 児童相談所や医療機関、若者サポートステーションなど外部専門機関との連携及び積極的な活用
- 3 北海道医療大学心理科学部臨床心理学科及び看護福祉学部福祉マネジメント学科の学生によるレクリエーション活動やカフェの実施

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの充実

- ・生徒、保護者、関係教職員を対象としたカウンセリングを実施した。
- ・教職員全体の相談体制の強化と生徒理解の深化を目的に、スクールカウンセラーによる校内研修を実施した。

2 外部機関の積極的な活用

- ・主に児童相談所との情報共有により、家庭において課題を抱える生徒への対応・支援について充実を図った。

3 北海道医療大学生によるレクリエーション活動及び「大学生カフェ」の実施

- ・大学生が企画したレクリエーションを年5回、「大学生カフェ」を年4回実施。新たな人間関係の形成とコミュニケーションスキルの向上を図った。

4 アセスメントツール「心と身体のチェックリスト」の実施と活用

- ・「心と身体のチェックリスト」を全年次、年4回実施。特に長期休業明けにストレスや不安を抱えている生徒をリストアップし、個別相談や保護者を交えた懇談を実施した。
- さらに、希望者については、スクールカウンセラーへと繋ぎ、見守り活動を継続した。

取組の成果等

○ 成果

- ・スクールカウンセラーのアドバイスにより、状況に応じて外部機関（医療機関や児童相談所等）へスムーズに繋ぐことができた。
- ・専門家による長年の助言が功を奏し、生徒に寄り添った指導の充実、相談体制の強化が徐々に図られ、生徒が相談しやすい環境が整ってきている。
- ・個別カウンセリングの実施により、適切な支援を受けて学校生活を意欲的に送る生徒が増えてきた。
- ・大学生との触れ合いを通し、生徒個々のコミュニケーションスキルが向上してきた。

○ 課題

- ・アセスメントツールの新たな活用方法について検討が必要である。
- ・継続的なカウンセリングを必要とする生徒、保護者が増加傾向にあり、すべての希望者に対応することが困難である。

○ 次年度に向けて

- ・高大連携事業のさらなる充実を図る。
- ・オンラインによる相談体制の充実を図る。

北海道蘭越高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：43名

本校の目指す生徒像

- 1 チャレンジ精神に富み、主体的に学び、行動する生徒
- 2 自然や郷土を愛し、地域や社会の発展に寄与する生徒
- 3 コミュニケーション能力に富み、他者との協調・協働を通して己を高める生徒

本校の現状

- ・素直な生徒が多いが、自己肯定感が低い生徒、自己表現が苦手
で人間関係の構築に課題を抱える生徒が見られる。
- ・中学校までに不登校傾向があった生徒が各学年に複数在籍して
いる。

本校の取組の特徴

- 1 スクールカウンセラーによる自殺予防教育の取組。
- 2 スクールカウンセラーの個別カウンセリング（月1回）、健康観察・教育相談アンケート（週1回）、全校面談（年2回）による、生徒理解と早期対応のための取組。

取組の内容

○ 自殺予防教育の取組

- 1 教職員向け自殺予防研修（講師：本校スクールカウンセラー 高杉 ゆう子 氏）
自殺予防に関する正しい知識や援助希求の重要性に関する認識を高めるとともに、支援や相談等の手法を学び、スキルアップを図った。※管内の学校・教育委員会より15名が会場・リモートで参加。
- 2 生徒向け自殺予防講話（講師：本校スクールカウンセラー 高杉 ゆう子 氏）
「いのちのおはなし」という題で講話をいただいた。いのちについて問いかけ、生き方や心の扉の開き方等を考える時間となった。※管内の学校・教育委員会より11名がリモートで参加。
《生徒の感想》
・人間は「パズル」という言葉にすごく共感しました。みんな違うからこそ、得意なこと苦手なことがあり、助け合わなければいけない。
・「心のドアを締め切っている人は自分からしかドアを開けられない」ので、助けを必要としている人がいたら、ノックできるような人になりたい。

○ 生徒理解と早期対応のための取組

- 1 個別カウンセリングの充実
希望生徒を対象に、月1回程度スクールカウンセラーによる個別のカウンセリングを実施した。教育相談の内容は共有し、その後の支援等に活用するなど、生徒理解の深化に努めた。
- 2 健康観察・教育相談アンケートの実施
毎週、全校生徒を対象に健康観察・教育相談アンケートを実施し、心の変化や困り感等の早期把握が可能になっている。アンケート後には変化を把握した生徒に速やかに面談し、聞き取った内容を教員間で情報共有等の対応を取り、個別カウンセリングと連動するなど組織的に行っている。

取組の成果等

○ 成果

自殺予防講話の実施により、今までの気持ちを振り返ることや、自分に向き合うことができた事後アンケートに回答する生徒が多く見られた。教員向け研修会では共通理解がより深まったことで、多様性を受け入れて生徒一人ひとりに向き合えるようになった。全校面談等にもスムーズに繋がった。

○ 課題

毎年様々な課題をもって生徒が入学することから、アセスメントツール等の効果的な活用方法について、より一層研修に取り組む必要がある。

○ 次年度に向けて

実施した講話や研修では管内の関係機関に案内し、オンライン等で多くの方の参加があった。関心の高いテーマであり、貴重な研修機会にもなることから、今後は町内の小中学校との連携した取組も併せて進め、共通理解を深めて支援の引継ぎ等をスムーズに行えるようにしたい。

北海道白老東高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：141 名

本校の目指す生徒像

- ・主体的に取り組むことができる生徒
- ・多様な人々を尊重し、自他の生命尊重ができる生徒
- ・協働して様々な課題を解決できる生徒

本校の現状

- ・中学時、不登校を経験し、自己肯定感が低い生徒が多い。
- ・ストレスへの対処を身につける力が必要。
- ・コミュニケーション能力の育成が必要。

本校の取組の特徴

1. 外部人材を活用した取組（スクールカウンセラーによる講話・保健師による講話の実施）
2. スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの実施
3. アセスメントツール「ほっと」「ほっとプラス」「心と身体のチェック」の実施

取組の内容

○ 外部人材を活用した取組

1 スクールカウンセラーによる支援

スクールカウンセラーによる講話で人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組を実施した。

- ・1 学年 コミュニケーションと自殺予防教育・自己分析(エゴグラム)など
- ・2 学年 ストレスの解消方法・コミュニケーションなど
- ・3 学年 恋愛講座として、性の多様性や性的同意、コミュニケーションなど

生徒の感想は、「悩みを人に相談することは、かつこ悪いことじゃないんだと思った」、「話し方や聞き方によって相手に与える印象が違うんだなと思った」、「普段話さない人ともコミュニケーションがとれて楽しかった」、「長所を教えてもらうことで、自分の知らない長所を知ることができた」、「自分や他人を大切にすることが大事だと思いました」など取組に対して肯定的なものが多かった。

2 スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの実施

希望した生徒・保護者を対象に実施。その結果を基に、関係職員とSCによる情報交換を実施し、今後の生徒支援について協議した。

3 アセスメントツール「ほっと」「ほっとプラス」「心と身体のチェック」の実施

「ほっと」を4月と10月、「ほっとプラス」を4月、「心と身体のチェック」を夏季休業前後と冬季休業前後に実施。その結果を担当・学年に周知し、生徒支援に活用した。

取組の成果等

○ 成果

生徒は、普段話をしないクラスメイトとのコミュニケーションで、最初は緊張していたが、徐々に話ができるようになっていった。相談することの必要性やストレスへの対処法など、少しずつ理解が深まっている。

○ 課題

講話後は、それぞれ内容を意識したコミュニケーションをとる行動が見られるが、時間が経過すると、また、友人関係が険悪になるような言動がみられたため、継続した指導が必要である。

アセスメントツールを複数活用しているが、すぐに分析ができず、そのときの生徒の実態に合わせた対応ができないことがある。また、ツールの分析方法について、継続した教員向けの研修が必要である。

○ 次年度に向けて

- ・今後も継続的に、集団形成プログラム、自殺予防の講座を実施できるよう計画する。
- ・スクールカウンセラーの個別カウンセリングを今後も継続する。
- ・アセスメントツールを活用した生徒理解に関する教員研修を計画する。

北海道追分高等学校

課程：全日制
学科：普通科
生徒数：58名

本校の目指す生徒像

主体的・協働的に学習に向かう生徒。自律的に行動し、実践力のある生徒。豊かな感性を持ち、他者に寛容な生徒。他者の意見を尊重し、自分の意思を表現できる生徒。

本校の現状

生徒自ら状況判断し、適切に行動する能力と自己肯定感の育成を図るための継続的な取組が必要である。

本校の取組の特徴

1. 教育相談による生徒理解の深化とサポートを図る。
2. 集団カウンセリングを通して、生徒の健康教育の充実を図る。

取組の内容

- 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組
(○ 外部人材を活用した取組(スクールカウンセラー(S C)による支援など))

1 教育相談による生徒理解の深化とサポートを図る。

〈分析結果を活用するための連携〉

- ・校内委員会(生徒サポート委員会)が中心となり、教職員で共有し、日常的な観察や声掛けを行っている。
- ・Hyper-QU実施後は、校内研修会を実施し、分析結果の振り返りを教職員全員で行い、S Cから助言を受けている。
- ・学年別ケース会議では、パートナーティーチャー及びS Cに出席してもらい、助言を受けている。

2 学年別集団カウンセリングを通して、生徒の健康教育の充実を図る。

問題行動が発現することを防ぐために、予防的対応を行った。

〈学年別のテーマと感想〉

- ・1学年「ストレスの理解と対処方法について」
意外と溜まっていることに気づいた。気持ちを押し込めやすいので、周りに相談しようと思った。
- ・2学年「対人関係とアサーションについて」
自分と他人の違いを知った。自分や周囲を傷つけないストレス発散が必要だと思った。
- ・3学年「卒業後に向けた心構えについて」
疲れている時こそ自分を大事にしていきたいと思った。



取組の成果等

○ 成果

上記の取組により、生徒理解を深めることができた。集団カウンセリングをきっかけに、生徒の心の健康を把握し、S Cによる個別カウンセリングにつなげることができた。

「ほっと」では、1年生は「関係維持」「仲間強化」「援助要請」の4因子、3年生は「自己統制」「援助要請」2因子が上昇した。

○ 課題

上記の取組の前後で、多くの生徒の「ほっと」の結果に伸長が見られたが、一部の生徒には変化が見られなかった。変化が見られなかった生徒への一層の個別支援が必要である。

○ 次年度に向けて

生徒一人ひとりの認知能力に差があるため、個別の支援のあり方について検討が必要である。

北海道鵒川高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：136名

本校の目指す生徒像

- 一人ひとりの個性を伸ばし、明るく豊かでたくましい人間を育成する。(学校教育目標)

本校の現状

- 「対人関係が苦手」「精神的に不安定」等、学校生活に不安を抱え、支援やサポートが必要な生徒が多く入学してくる傾向がある。

本校の取組の特徴

- コミュニケーションスキルアップトレーニング（CST）の取組
生徒サポート委員会やSCを中心に、コミュニケーションスキル向上のためのトレーニングや人間関係作りを支援する集団カウンセリング等の取組を継続的に実施している。
- 絵本セラピーの実施
自分の感情や考えを表現したり、他者の感情や考えを受け入れる経験をするを目的として、学年ごとに、絵本セラピストによる絵本セラピーを実施している。

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 コミュニケーションスキルアップトレーニング（CST）の取組

生徒サポート委員会やSCを中心に、全学年に人間関係作りのためのCSTの授業を実施した。特に1学年は、年度初めにクラス作りのための集団カウンセリングを行った他、「傾聴」や「アサーティブな伝え方」、2学年では「自己理解」、3学年では「自己主張」をテーマにして実施した。

生徒からは、「一人ひとり考えが違ふことが分かった」「相手への伝え方を考えることができた」などの感想があり、コミュニケーションの取り方を学ぶことができた。

2 絵本セラピーの実施

学年ごとに、絵本セラピストによる絵本セラピーを実施した。絵本を使用することにより、自分や他者の感情や考えを表現したり理解して受け入れる体験をして、コミュニケーション能力の育成を図った。

生徒は、絵本を読んでもらうことで癒され、また自他のことについて考えることができ、予防的・開発的な視点に基づく人間関係の構築やコミュニケーションについて考えることができた。

取組の成果等

○ 成果

CSTの実施やSCの個別カウンセリング、外部講師による絵本セラピーなどにより、コミュニケーションのポイントとなる「傾聴」や「アサーティブな伝え方」について考えたり、他者の気持ちを考えたりすることが、少しずつできるようになってきている。

また、SCによる校内研修により、様々な特性を持った生徒について、生徒理解を深め、生徒対応について理解することができた。

○ 課題

本校は、自分の言動が他者にどのような影響を与えるのかを理解していない生徒が多く、人間関係のトラブルが多い。担任や教科担任、部活動顧問だけでなく、SCや外部機関との一層の連携が必要である。

○ 次年度に向けて

アセスメントツールを活用したり校内研修を実施して、生徒理解を深め、多様な生徒に適切な生徒指導や支援ができるようにしたい。また、教員間の連携や関係機関とも一層連携し、様々な角度から生徒を支援できるようにしたい。そのため、次年度もぜひこのプログラムを活用し、社会に出て活躍できる生徒の育成に努めたい。

北海道南茅部高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：20名

本校の目指す生徒像

何事にも積極的に挑戦する生徒
思いやりをもち、規律正しく生活ができる生徒
健やかな心身・地域への誇りをもつ生徒

本校の現状

不登校を経験している生徒やコミュニケーションに苦手意識がある生徒が多くみられる。

本校の取組の特徴

- 1 全教職員による組織的な教育相談
- 2 スクールカウンセラーによる個別カウンセリング
- 3 スクールカウンセラーによる心理教育

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 全教職員による組織的な教育相談（年間3回）

年度始めに生徒が話してみたい教員を選択し、各生徒に面談担当者を決定した。長期休業明けの心が不安定になりやすい時期に面談を実施した。面談前には「アセス」や「ほっとプラス」等の結果を全教職員で確認し、要支援生徒について担任や面談担当者と情報共有を行った。

2 スクールカウンセラーによる個別カウンセリング（年間7回）

希望のあった生徒や教員が必要と判断した生徒に対して、個別カウンセリングを実施した。また、1学年には中学校在籍時に欠席日数の多かった生徒が多く在籍していたため、スクールカウンセラーとの顔合わせという形で全員に個別カウンセリングの機会を設定した。

3 スクールカウンセラーによる心理教育（年間6回）

1学年の生徒を対象に、話すスキル・聞くスキル・人と関わるスキルの向上を目指した心理教育を実施した。また、ワークを通して自己理解を深めたり、クラスメイトのよいところを伝え合うことで仲間を相互に理解しあったりする経験を重ねた。

取組の成果等

○ 成果

- ・教育相談を通して、生徒が相談しやすい環境をつくることができた。
〈生徒の感想〉
 - ・普段話しづらいことを話すことができた。
 - ・悩みを話してスッキリした。
- ・スクールカウンセラーとの関わりを通して、専門的な助言により前向きな行動変容がみられた。また、円滑なコミュニケーションをとるためのスキルの向上や自己・他者理解を深めることができた。

○ 課題

持病により安定して登校することができない生徒がおり、心理教育に参加する生徒が少ないことが多くあった。少人数に対応した内容へ変更するために、スクールカウンセラーに負担をかけてしまう場面があった。

○ 次年度に向けて

不登校を経験している生徒や悩みを抱える生徒が安心して学校生活を送ることができるように、生徒の実態に合わせて今年度の取組を継続する。また、スクールカウンセラーと密に連携し、心理教育の内容を検討していく。

北海道松前高等学校

課程：全日制
学科：普通科
生徒数：49名

本校の目指す生徒像

- 1 自ら学び自ら考え積極的に行動する人
- 2 規律を守り心身ともにたくましい人
- 3 他を思いやり郷土愛と広い視野を持つ人

本校の現状

- ・自己表現が苦手で、人間関係を築くことに課題を感じている生徒や自己肯定感の低い生徒が複数在籍している。
- ・今年度入学した生徒の中で、不登校傾向にあった生徒が複数在籍している。

本校の取組の特徴

- 1 スクールカウンセラーを活用した人間関係形成能力の育成
- 2 年2回の教育相談週間の充実、アセスメントツールを使用した事例検討会の実施
- 3 月1回程度発行している教育相談通信の充実

取組の内容

○ スクールカウンセラーを活用した生徒の人間関係形成能力の育成を図る取組

自らの心の危機を早期に認識し、心身が不調なときの対応やストレスに対処する能力を育むことを目指し、学年単位でスクールカウンセラーによる心理学講話を行った。

・1年生：青年期の心の成長と自己肯定感

- ① 青年期から成人期にかけての心の変化や課題について知る
- ② 自己肯定感が心の健康に与える影響について知る
- ③ 自己肯定感を高める具体的な方法を実践する

・2年生：社会で活かす怒りの活用方法

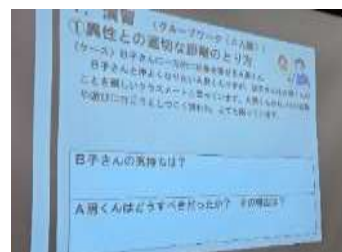
- ① 怒りの感情がもつポジティブな側面を知る
- ② 自分の怒りの表現パターンを客観的に知る
- ③ 社会に出ることを見据えた建設的な感情表現の方法を学ぶ

・3年生：社会で求められる適切な距離感とかかわり方

- ① パーソナルスペースの概念と重要性を知る
- ② 場面や関係性による適切な距離感の違いを知る
- ③ 社会での健全な人間関係を構築するスキルを学ぶ

○ 教育相談週間の充実を図る取組

全校生徒に対し、5月と10月の年2回、全教職員による教育相談を実施した。生徒が気軽に話せる環境や関係性をつくるために、面談を実施する前に、どの教員と面談をしたいのか、どのようなことを話したいのか等について希望調査を行った。また、アセスメントツール hyper-QU の結果についての事例検討会を全教職員で実施し、生徒の状況について把握し、早期の対応につなげた。



取組の成果等

○ 成果

心と体のチェックの項目が、教育相談週間後・心理学講話実施後に複数の項目で改善が見られた。特に「身体の不調」及び「心配や不安」の項目で数値が改善した。

○ 課題

心理学講話実施後の心と体のチェックの項目（特に「落ち込みや無気力」「環境ストレス」）で数値が上昇した。自分の心を振り返る場面があったための一時的な上昇であると考えられるが、それらに対して補完する機会を設定する必要がある。

○ 次年度に向けて

下地づくりの教育（教育相談週間等）と自殺予防教育プログラムについて計画的に設定し、継続的に取り組んでいく必要がある。

北海道礼文高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：49名

本校の目指す生徒像

自ら学び、創造する生徒を育成する
自ら考え、実践する生徒を育成する
自ら鍛え、思いやりのある生徒を育成する

本校の現状

少人数だが、地元生徒の他、全国各地より入学する生徒も約半数を占める。多様な生徒の集団であることから、生徒一人ひとりのコミュニケーション能力を育成し、人間関係の構築を図るよう、学校生活の中で意識して取り組んでいる。

本校の取組の特徴

- 1 外部人材を活用した取組 ～ 集団カウンセリングの実施
- 2 日常的にソーシャルスキルトレーニングを取り入れる工夫

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 外部人材を活用した取組 ～ 集団カウンセリング

- (1)「ダイバーシティとインクルージョン」
- (2)「自分の気持ち・相手の気持ち～みんなで一緒に考えてみましょう」
- (3)「苛立ちや怒りの感情を理解し、相手のSOSを受け取る力を身につけてみよう！」
- (4)「リフレーミング」

2 日常的にソーシャルスキルトレーニングを取り入れる工夫

- (1)教育相談便りの発行
- (2)宿泊行事におけるソーシャルスキルトレーニングの取組

○ その他

- 1 個人面談・健康相談・進路面談など全校生徒を対象にした個別のカウンセリング
- 2 ポスターやリーフレット等による啓発
- 3 学校薬剤師によるオーバードーズについての講話



取組の成果等

○ 成果

集団カウンセリングの実施により、物事を様々な角度から捉え、多様性を認めるきっかけとなるとともに、他者理解の必要性を捉えさせることができた。また、日常的な呼びかけを行うことで積極的に話したり聞いたりする態度を育成することができ、援助希求につなげることができた。

○ 課題

他者への理解、集団への理解は深まったが、自己表現力が乏しく、自己肯定感を高める取組を強化する必要がある。

○ 次年度に向けて

アサーショントレーニングを中心に、個々の自己肯定感を高め、よりよい人間関係が構築できるよう取組を工夫する。

北海道雄武高等学校

課程：全日制
学科：普通科
生徒数：60名

本校の目指す生徒像

スクール・ポリシーに示す育成を目指す資質・能力を身に付けた生徒。1 社会生活を営むための基礎的な力、2 知識を活用し、課題を解決する力、3 自ら自信を持ち、他人を認め、協力することができる力

本校の現状

固定的な友人関係や人間関係に悩み、自尊感情が低い生徒が多く見られることから、コミュニケーションスキルを身に付けさせ、自己肯定感を高める活動を通じて、良好な人間関係づくりを目指す。

本校の取組の特徴

1. 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の向上を目指し、ピア・サポート活動を実施。
2. スクールカウンセラーによる教育相談活動の実施。

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の向上をめざしピア・サポート活動を実施

(1) 学年間ピア・サポート 【1・2年生】【日時 5月～12月】

- ・内 容 1年生はピア・サポート活動（計6回 仲間理解、話の聞き方、問題解決能力、効果的なストローク、非言語コミュニケーション、アサーション）にて人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の向上を目指す活動を実施し、2年生はピア・サポーターとして事前に教師からその役割や活動の進め方について学び、支援計画を各活動グループで作成、1年生のピア・サポート活動の支援を行った。

- ・成 果 1年生は円滑なコミュニケーションの方法などのスキルを学び、2年生はピア・サポーター役を担い自分たちで決めたプログラムを実行することで自己肯定感や達成感を得た。

(2) 町民へのピア・サポート活動 【3年生・町民（児童・大人・高齢者の3団体）】【日時 ～7月】

- ・内 容 取材活動を通して、各団体（小学校・企業・高齢者施設）が抱えている課題や活動への要望を聞き取り、これまでのピア・サポート活動で培ったスキルやノウハウを基に課題解決を図るなど、町民のピア・サポート活動の支援を行った。

- ・成 果 取材活動を通して各団体の実情や課題を把握することにより、より寄り添った課題解決の方法を模索し、提案することにつながることができた。また、良好な人間関係づくりを学ぶよい機会となった。

2 スクールカウンセラーによる教育相談活動の実施【全校生徒】【全6回】

- ・内 容 北海道教育委員会委嘱スクールカウンセラー、草浦 祐美 氏に御来校いただき、全校生徒を対象とした個別面談を6回に分けて実施した。また、相談室の昼休み開放を実施し、カウンセラーとのコミュニケーションを通じた相談活動も実施した。

子ども理解支援ツール「ほっと」の結果等から生徒の状況についてアセスメントを行い、必要に応じて個別面談等を実施した。

- ・成 果 中学生のときに欠席が多かった生徒や困り感を感じている生徒、コミュニケーションが苦手な生徒等、悩みや相談事があっても相談するという行動に移せない生徒も多いため、全校生徒を対象にした面談は話す機会の確保として効果的であった。

※ アセスメントツールの定期的な実施と分析等の活用

「ほっと（子ども理解支援ツール）」及び「Ai Grow（資質・能力アセスメントツール）」では生徒の資質と能力の変化、「Google フォームでの心の健康調査」、「心と身体のチェック」ではストレスや不安を抱えている生徒の様子について、教職員間で共有することができ、日常的な観察や声かけ、個人面談を迅速且つ適切に実施するなどの対応につなげることができた。



取組の成果等

○ 成果

「ほっと」の結果より、本校生徒のソーシャルスキルはほとんどの項目で全道平均を上回り、特に「あいさつをする（礼儀）：3.7」、「相手を思いやる（配慮）：3.6」、「仲間に加わる（参加）：3.5」、「相手をたたえる（称賛）：3.4」と高く、ピア・サポート活動等の成果であると考えられる。「Ai Grow」は生徒の資質・能力を可視化することで、生徒が自己理解を深め、活用することで学校生活をより主体的に取り組む姿勢を育むことができた。

○ 課題

生徒の日常的なコミュニケーション力の更なる向上と自己肯定感の醸成に向けた取組を今後も継続して行うこと。

○ 次年度に向けて

町民へのピア・サポート活動や「ほっと」、「Ai Grow」の効果的な活用については、年度末反省を踏まえ、より一層の充実を図る。

北海道音更高等学校

課程：全日制
学科：普通科
生徒数：279名

本校の目指す生徒像

「心豊かに生きる基礎を築くために」
・自ら学ぶ ・自ら行う ・自ら鍛える

本校の現状

優しく素直な生徒が多いが、対人関係が固定化する傾向が強く、人間関係を形成する力やストレス対処法、援助希求的態度の育成が必要である。

本校の取組の特徴

1. コミュニケーション能力と援助希求的態度の育成
2. 外部人材を活用した生徒理解を深化する取組

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 コミュニケーション能力と援助希求的態度の育成

- ・1年生を対象に、養護教諭による集団カウンセリングを年4回実施した。
1回目は（構成的グループエンカウンター）（4、5月）、2回目は多様性理解・認知特性（8月）、3回目は対話スキル（9月）、4回目は話し合いの方法・ファシリテーションスキル（10月）を実施した。

生徒の感想：人はそれぞれ違うこと、違いを理解して生活していきたい。自分のことを知るのは楽しい。もっと、自分のことを知りたい。

- ・保健体育担当教員と養護教諭のTTで、単元「現代社会と健康」の「精神疾患の予防」についての授業を実施した。ストレスや不安をコントロールする方法として、「考え方のくせ」と対処法について、ワークを用いて自己理解を図った。対処法の中に「相談」の重要性と必要性についてのグループワークを実施し、実際に相談の仕方と相談の聴き方についてペアワークを行った。

生徒の感想：自分だけでため込まず、信頼できる人に頼ることも大切だと考えることができた。



集団カウンセリング
（ファシリテーションスキルのトレーニング）

2 外部人材を活用した生徒理解を深化する取組

いじめ、自殺等生徒指導上の諸課題の解決に向けた適切な対応について、専門家の見地から学ぶことをテーマに、校内研修会を2回実施した。
1回目は、北海道いじめ問題等解決支援外部専門家チーム員の中嶋和典弁護士を講師にグループで事例検討を実施した。2回目は、北海道大学大学院教育学研究院准教授 加藤弘通氏による講演会「見方を変えて子どもの問題を見る」を実施した。



校内研修での事例研等の様子

取組の成果等

○ 成果

- ・年次や教科と連携し、年間を通して重層的に実施することができた。コミュニケーションはスキルであることを毎回伝えることで、生徒たちは諦めずに他者と関わる取組ができていた。
- ・「ほっと」の結果では、全ての項目が上昇した。専門家による校内研修会を開催し、教職員の共通認識が高まった。問題の捉え方や生徒理解が深まり、組織的な対応につながった。

○ 課題

複数あるチェックリストやデータを有効活用するために校内体制を再構築する必要がある。

○ 次年度に向けて

本プログラムを全校的な取組とするために、全教職員が関わりをもてるように業務内容を整理する。

北海道帯広柏葉高等学校

課 程：定時制
学 科：普通科
生徒数：53名

本校の目指す生徒像

- 1 磨かれた知性を持ち、主体的に行動できる人間
- 2 豊かな個性を持ち、思いやりのある人間
- 3 逞しい身体と意志をもち古里を愛し積極的に社会で活躍できる人間

本校の現状

- ・援助希求やソーシャルスキルの向上が必要。
- ・地域社会の中で、協力し合える体験が必要。
- ・多様な生徒支援に関する指導技術の向上が必要。

本校の取組の特徴

- 1 外部講師による生命の大切さ講話・集団カウンセリングとピアサポート活動・キャリア教育
- 2 スクールカウンセラーによる悉皆面談などを通して、悩みに寄り添った指導
- 3 パートナーティチャー事業による助言、サポート委員会を中心とした多様なニーズの生徒支援
- 4 専門家による指導助言（教職員研修）

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1 自殺予防教育の取組

外部講師による講話において、自身のストレスの回避や援助希求の仕方や、他者を支援する対人スキルの向上を図る機会となった。

2 アプリによる「心の健康観察」の取組

本校では、年4回の「心と身体のチェックリスト」を全生徒に実施。クラウドのアンケートを活用することにより、生徒は自由な時間に入力することができた。年2回「ほっと」を実施し、生徒自身が成長を実感できた。客観的なデータを全教職員で情報共有できた。



【生徒向け講話の様子】

3 サポート委員会を中心とした多様なニーズの生徒支援

スクールカウンセラーによる悉皆面談を1年生で行い、悩みごとを相談している。専門家による集団カウンセリングを通じて、自他共に大切な存在であることを意識できるHR活動となった。

4 専門家による指導助言（教職員研修）

教職員研修を通じて、SOSの受止め及びゲートキーパーについて意識することができた。

取組の成果等

○ 成果

ICTを活用したアセスメントツールを複数回の実施をすることで、自分の感情や疲労について、比較して観察したり、他者の言動に理解を示そうとしたりするなど、生徒自身の発言から一定の成長を感じている様子が見受けられた。また、外部講師の講話から、自他共に大切にしている等ピアサポート活動の充実などが図られた。いじめの未然防止に取組むことができ、HR活動の充実につながった。

○ 課題

多様なキャリアを持つ各教員の研修ニーズを満たすために、指導スキルの向上について継続的に教職員研修を実施していくことが必要である。

○ 次年度に向けて

- ① キャリア教育の充実とメンタルヘルスは、生徒一人一人の安定した成長に繋がる両輪なので、各生徒の自立と教職員の協働体制の更なる伸長にむけて、引き続き取り組む。
- ② 継続的なアセスメントの実施によるデータの比較により、各生徒の変容を把握する。

高校生ステップアップ・プログラム実施要項

(平成25年5月17日学校教育局長決定)
(平成28年5月20日一部改正)
(平成30年4月6日一部改正)
(平成31年4月19日一部改正)
(令和2年4月10日一部改正)
(令和3年5月6日一部改正)
(令和5年4月21日一部改正)
(令和6年4月11日一部改正)

1 趣旨

高校生のいじめや不登校、中途退学の背景として、「人間関係をうまく保てない」など、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の不足によるものもあり、心の不安定さからいじめや不登校、中途退学につながる場合が少なくない。また、本道においても、児童生徒の自殺が少なからず発生しており、北海道学校保健審議会の調査では、自殺や死について考える児童生徒が一定程度いるという結果が出ていることから、児童生徒等の自殺予防に関する正しい知識や援助希求の重要性に関する認識を高める必要がある。

このような状況を改善し、道立高等学校におけるいじめや不登校、中途退学の未然防止、自殺の予防を図るため、予防的・開発的な視点に基づく生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組（以下、「集団カウンセリング」という。）や、自殺予防教育プログラムを活用した取組を実践するとともに全道の高等学校への普及を図る。

2 事業の実施主体

- (1) 本事業は、北海道教育委員会（以下「委員会」という。）が実施する。
- (2) 本事業は、文部科学省の委託を受けて実施することができる。

3 事業の内容

(1) 高等学校の取組

ア 集団カウンセリングの実施

実施校は、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図るため、計画的に集団カウンセリングを実施する。

イ 自殺予防教育の取組の実施

実施校は、「自殺予防教育プログラム」を積極的に活用し、計画的に自殺予防教育の取組を実施する。

ウ アプリによる「心の健康観察」の実施

実施校は、アプリによる「心の健康観察」を活用し、教職員が生徒の心や体調の変化を把握し、心のSOSの早期発見につなげる取組を実施する。

エ 外部人材を活用した取組の実施

(ア) スクールカウンセラーによる支援

実施校は、「心と身体のチェック」等による生徒のアセスメントに基づき、生徒への集団カウンセリングやアセスメントの実施及び本事業の実施のための指導助言、教員研修等に、積極的にスクールカウンセラーを活用する。

ただし、スクールカウンセラーの活用時間数については予算の範囲内とする。

(イ) 北海道いじめ問題等解決支援外部専門家チーム員（以下「支援チーム員」という。）の活用

実施校は、生徒指導上の諸課題の解決に向けた取組の教員研修等に、積極的に支援チーム員を活用する。

オ 成果の検証

実施校は、本プログラムの成果を、次の(ア)から(オ)の項目により検証する。

(ア) 子ども理解支援ツール「ほっと」、アセスメントツール「心と身体のチェック」等を用いた客観的な指標に基づく評価

実施校は、「ほっと」等による調査を複数回実施し、上記ア、イに掲げる取組の成果を検証する。

(イ) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率の変化

(ウ) その他の生徒の状況

- ・上記ア、イの取組における生徒の感想
- ・上記ア、イの取組における生徒の活動状況の観察

(エ) 外部人材の活用状況

(オ) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

カ 学校プログラム（成果のまとめ）の作成

実施校は、上記ア～オの実施状況、成果や課題を踏まえ、他校の参考となるよう、実施時期や内容、参考資料等を取りまとめた学校プログラム（成果のまとめ）を作成する。

(2) 委員会の取組

ア 運営協議会の開催

委員会は、本プログラムの円滑な実施に資するため、実施校の職員、スクールカウンセラー、所管教育局高等学校教育指導班担当指導主事等の参加を得て運営協議会を開催する。

イ 集団カウンセリング研修会の開催

委員会は、実施校における取組の充実を図るため、実施校の教員等を対象に集団カウンセリング研修会を開催する。

ウ 取組状況の広報

委員会は、全道立高等学校における不登校や中途退学の未然防止、自殺予防の取組の充実に役立てるため、本プログラムの取組状況の広報に努める。

エ 拠点型オンラインカウンセリングによる支援

委員会は、不登校生徒を含めたオンラインカウンセリングが必要と考えられる生徒及びその保護者に対して、学校等とオンラインカウンセリングの拠点をオンラインでつなぐことにより支援する。

4 事業実施に当たっての留意事項

(1) 実施校は、事業終了後においても、学校独自でプログラムを継続的に実施することを想定した計画の策定及び検証を行うこと。

(2) 実施校は、スクールカウンセラーによる予防的・開発的教育相談の手法や集団カウンセリング、アセスメントに関する教員研修を実施し、知識や手法の習得の他、本プログラムに関する教員間の共通理解を深めること。

(3) 高校1年生に重点を置いて、仲間づくり支援やコミュニケーションスキルを育成する集団カウンセリングを実施すること。

また、国立・道立青少年教育施設において宿泊研修を実施する場合は、当該施設職員と連携し、集団カウンセリングを実施すること。

(4) スクールカウンセラーによる生徒への集団カウンセリングや教員研修は貴重な機会であることから、実施校は支障のない範囲内で、近隣校と連携して実施してよいこと。

(5) スクールカウンセラーの活用については、次の事項に留意すること。

ア スクールカウンセラーの人材確保については、実施校が行うこと。

イ 予防的・開発的教育相談の手法は多様であることから、必要に応じて複数のスクールカウンセラーを活用してよいこと。

ウ スクールカウンセラーの任用、報酬等の支給事務等については、「北海道公立学校スクールカウンセラー（非常勤）設置要綱」（令和3年3月31日学校教育局長一部改正）によること。

エ 上記3(2)のエにある拠点型オンラインカウンセリングによる支援については、令和6年度スクールカウンセラー活用事業実施要領によること。

(6) 上記3(1)のウにあるアプリによる「心の健康観察」については、委員会がスタンドバイ株式会社と契約することにより、スタンドバイ株式会社が提供する「シャボテンログ」を無料で利

用することができる。なお、利用開始は8月頃を想定している。

- (7) 支援チーム員の派遣については、「北海道いじめ問題等解決支援外部専門家チーム実施要項（令和2年3月31日学校教育局長一部改正）によること。

5 実施期間

原則として1か年とする。

ただし、1年を超えて継続の希望がある場合は、取組状況や事業成果等に基づき委員会が継続を決定する。

6 事業の実施手続

- (1) 事業の実施を希望する道立高等学校は、実施計画書（別記様式1）及び所要経費計画書（別記様式2）を添付し、委員会に申請する。
- (2) 委員会は、上記(1)により提出された実施計画書等の内容を審査し、実施校を決定する。
- (3) 実施校は、実施計画書等の内容を変更する場合は、速やかに委員会に報告し、その指示を受けること。

7 事業の報告

- (1) 実施校は、実施報告書及び所要経費報告書を作成し、当該年度の指定された期日までに、委員会に提出すること。
- (2) 支出関係書類については、他の経費と区分して適当な帳簿を用いて整理し、使途を明らかにするものとし、事業を実施した翌年度から5年間保存すること。

8 その他

- (1) 委員会は、必要に応じ、事業の実施状況及び経理状況等について実態調査を行うこと。
- (2) この要項に定めのないものは、委員会及び実施校が協議の上、決定すること。

附 則

この要項は、平成25年5月17日から施行する。
この要項は、平成28年5月20日から施行する。
この要項は、平成30年4月6日から施行する。
この要項は、平成31年4月19日から施行する。
この要項は、令和2年4月10日から施行する。
この要項は、令和3年5月6日から施行する。
この要項は、令和5年4月21日から施行する。
この要項は、令和6年4月11日から施行する。